廣讃寺ジャーナル

第171号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341
〈E-mail〉
matsuoka@kosanji.or.jp

今さえよければ

太陽の寿命はあと五十億年と言われています。太陽は死ぬときにすごい勢いで膨張し地球はそれに飲み込まれてしまいます。それで地球もその時に死をむかえると言われています。

それは大変なことだから何とかしなければと思う人はいないでしょう。なにせ五十億年後の話ですから。なんといっても自分が死んで五十億年後の話ですから。

地球温暖化はいよいよ目に見えて差し迫って来ました。このままでいけば百年後は今より気温が四度上昇し異常気象や海面上昇により陸地が減少し多くの種の生物が絶滅すると予想されています。人間にとっても災害が増え、経済は悪化し生態系なリスクも増えます。このことは五十億年後とは違い、もうすでに温暖化の兆候は数十年前からさんざん言われており今では色々な場所で被害が出ています。

「今さえよければいい」「自分さえよければいい」という我々が持つ心が地球を人類の住めない惑星にしてしまいます。まあその頃には自分は死んでいるから大丈夫だろうと思う人も少なくないはずです。

現在のところ日本は先進国と言われていますが、今後の日本経済はどう考えても暗いです。今の生活は高度経済成長で蓄えたものを食いつぶしている状況です。とりあえず自分が生きているうちはなんとか日本経済がもってほしい、自分が死んだあとはもう知らない。そんな声がたくさん聞こえてきます。

釈迦弥陀二尊の和合（3）

田中 智教

三回に分けて書き進めてきました「釈迦弥陀二尊の和合」も今号で完結といたします。このような和合というタイトルを付しておいて申し上げるのもおかしなことですが、前号にも触れました通り、釈迦（お釈迦様）と弥陀（阿弥陀様）は、「教主（教えを説く者）」と「救主（私たちを救う者）」という役割の違う別人格であると捉えることが基本的なことだと思います。しかし、尊ぶ意味でその二尊を「和合」して、重ね合わせて敬うということがあっても良いのではないかとも思うのです。もちろん、「なぜお釈迦様の軸を本堂内に掛けないのですか」というご質問に応答する意味での了解であることもご承知おきいただきお読みくださればと思います。

このことについて、先輩が仰っていたのは「私たちが見及ぶお釈迦様と阿弥陀様の容姿は似ていますよね。本堂内にお釈迦様のお姿が存在しなくても、私は阿弥陀様のお姿にお釈迦様を投影（とうえい）させて南無阿弥陀仏と称えてい

ます」との受け止めでした。基本的には区別すべき二尊であるにも関わらず、不思議と共感する私がいました。くれぐれもご注意いただきたいのは、いたずらに釈迦と弥陀を同一と捉えるような言葉ではありません。また、無理矢理に結合させて混ぜて考えるということでもありません。まさしく、〝ご本尊として安置される阿弥陀様を通じてお釈迦様をも感ずる〟という姿勢から出た言葉だと思うわけです。また、先輩は「親鸞聖人は、『教行信証』の中に釈迦牟尼仏との記述も数カ所あります。このことについてもよく考える必要があると思います」とのことでした。

「釈迦牟尼仏」といえば、前号で申し上げましたが、他宗におけるご本尊格でもあり「仏」です。また、ご和讃に「釈迦如来」ともあります。釈迦を「仏」あるいは「如来」と敬う親鸞聖人のお言葉から、「阿弥陀仏」や「阿弥陀如来」と同じように釈迦からも大いなるはたらきを受け取っておられるのではないかと思うのです。

「釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯い」（『真宗聖典』一五〇頁）の「拯い」とは、釈迦の手には水かきがあり、水を漏らさないといわれます。その水とは私たち人間のことです。また、その「拯い」とは溺れている者を引き上げるとも表現されます。弥陀が「救主」として私たちを救い、釈迦もまた、私たちを「拯う」存在であると窺い知ることです。

このたびのご質問に対して真正面からお応えすることはできませんでしたが、先輩が感得されるその姿勢から、釈迦と弥陀の関係、あるいは親鸞聖人のご了解についてご一緒にお考え願えないかとも思います。少なからず、私はその先輩に連なって歩みを進めていきたいと思いを新たにしたことです。（完）

不安な社会

毎日、多数コロナ感染者が出ている中で国民ひとりひとりの中で慣れがでてきているように思います。もう三年目になりました。もうピリピリと緊迫する精神状況を四六時中続けるのも限界になってきたのかもしれません。第一波のころは感染者数が多いときには日本国内で一日に六百人ほどでした。その時はエレベーターのボタンを押すのも感染するのではないかと思い、ボタンを触れることに躊躇（ちゅうちょ）しました。緊急事態宣言も出されバス停に待つ人影はなくなりました。飲食店に入ったら感染するような社会的な雰囲気になったものの、不思議とスーパーやホームセンターはたくさんの人でいっぱいでした。

その後ウイルスは幾度か変異し、今年に入ってからは一日に十万人を超える日もありました。四月下旬の現在でも一日に四万人ほどの感染者が出ています。コロナも以前ほど重症化しないからと言われますが、死亡率が減ってはいるものの死亡者数は第一波の時より増え今年に入ってから二万人ほどになっています。しかしまん延防止も解除され街は普通に戻りました。マスコミもコロナに関してあまり報道しなくなりました。

数字上では十数人に一人はコロナにかかったことがあるということになるそうです。まだコロナ社会になって間もないころ、コロナに感染した人は差別的な目で見られていたように思います。しかし今ではコロナが決して珍しいものではなくなり世間からの見られ方が大きく変わりました。多くの人は病気そのものより、人さまからの目におびえていたのかもしれません。

行事予定

六月二十八日（火）　十時　親鸞聖人命日のお勤め